

ヨーロッパの遺産とJGE（大日本帝国）  
 ：工業文明を超えて  
 ＝ISSEI 第4回会議報告<sup>1)</sup>

中 野 泰 雄

1. マックス・ウェーバーとエジプト

わたしは前回のアールボルグ会議<sup>2)</sup>では”普遍史（Uniniversal History）の立場に立って、崩壊した大日本帝国（1890～1945）の中にあったアジアとヨーロッパの間の相剋を観るための論文を発表しました。しかし、いまここで、わたしは、私の貧しい知的道具をもって、よりむずかしい「新しいパラダイム（範型）をめざすヨーロッパ遺産」という問題と向い合わねばなりません。

わたしは72年前、1922年に生まれましたが、その年には、エジプトで盗掘されていないツタンカーメン王の墓が発見され、そして3年前の1991年までに生きつづけたUSSR（ソヴェト・ロシア社会主義連邦）が創設されました。しかし、わたしがこの両事件の意義を認識するにいたったのは、ここ数年のことです。わたしはマックス・ウェーバーの仕事を50年間、研究しつづけ、かれの生涯における転換点は1905年初めのロシア革命後に「古代における農業関係」を書き直した時点にあると考えておりましたが、古代エジプト諸王国における”父長的官僚制”を国制の「死に至る病」として解釈し、中国の諸帝国、より少ない度合で、後のローマ帝国およびビザンティン帝国の中に同じ運命を観ていたことを理解したのは、1988年にエジプト、ギリシャ、およびシナイ半島の遺跡観光を終えてからのこととあります。その旅行の後で、わたしはウェーバーが社会主義のシステム（体制）をグレコ・ローマン文明の夜明け前に化石化して没落をとげるエジプトの新王国とを比較していることに驚かされたのであります。ウェーバーは社会主義と資本

主義の両システム（体制）が、第一次世界大戦後、遅かれ早かれ、なんらかの形態の官僚制の“鉄の檻”に巻きこまれ、化石化することを予期していたにちがいないと、私は思います。しかし、かれはドイツ帝国崩壊後の混乱の中で、1920年の春に急死して、その結末を自分の眼で観ることはできませんでした<sup>33</sup>。

わたしは1990年のルーヴェン会議では、1500年以來の近代におけるナショナリズムの時空的回転を“マンダラ”と名づけた論を発表し、トランス・アトランティック（大西洋を越える）世界のヨーロッパ人による征服を近代の起点といたしました<sup>43</sup>。

会議から帰って、わたしはマンダラ（Mandala）の意味をもっと深く考えねばなりませんでした。そして、わたしは私の時空の尺度を人間生命のサイクルからわれわれの宇宙（ユニバース）のビッグ・バン（Big - Bang）へと拡張せねばならなくなったのであります。そこで、わたしは二年後のアールボルグ会議では、人類の歴史を政治的事件については、1860年代の日本革命における現実政治家（Real Statesman）勝海舟（1823-99）の提言によって7年のサイクルで考え、人間の世代交代を30年のサイクルで考え、そしてコンドラチェフ（Kondratieff）（1892-1938）の“長い波”の概念によって経済的事件を60年のサイクルで考えようとしてしました。この人生と経済におけるこれらのサイクルは中国古典の孔子（551-479）の言葉のなかの人生の段階とインド仏教における生命の“マンダラ”と一致しており、仏教はオリエントおよび地中海の古代文明を吸収していたにちがいないと考えだしました。わたしは70年間、私の“普辺史”に到達するためにさまざまにつづけて、同じユーラシア大陸と南北両アメリカにおける西と東との間の分化（differentiation）を融合し、同一化するに至りました<sup>53</sup>。

## 2. 大日本帝国と“ビスマルクの遺産”

わたしは1963年に40才で学園生活（Academic Life）に入り幸運にもヨ－

ロッパ思想史の大きな海変 (Sea-Change) を経験し、実存主義から構造主義、そしてポスト・構造主義への転変と、「知的起源」から「文化的起源」への深化の渦を体験することができました。1976年秋に創設された日本社会思想史学会に参加し、社会思想史についての講義を大学で持っておりましたが、私の比較社会思想史 (Comparative History Of Social Ideas) への道は、私の大学に新しく設けられた国際関係学部において、1991年春にようやく開かれたのであります。

わたしは第二次世界大戦中にマックス・ウェバーの社会経済史を1943年に読む努力を初め、戦後、宗教社会学の「儒教と道教」を翻訳したのでありますが、わたしがかれの作品「理想型、Ideal-Typus」概念を理解しはじめるようになったのは、「ウェバー・ルネッサンス」がヨーロッパで始まった1964年、かれの生誕百年の年でありました。それから5年、1969年1月19日、東大安田講堂事件の当日、偶然、大塚久雄教授の自宅を訪ねていた私は、大学紛争についての彼の見解を聞くことができたうえに、「マックス・ウェバーは40にならないければ解りませんよ」と晩学の私を勵ます言葉を聴くことができました。わたしはウェバーの世界宗教の社会学の諸著を研究しつづけていましたが、それは「近代 Modern」と通常よばれている国民国 (Nation-States) (1500-1950) を超えて、私を世界宗教の (500-1500) 世界の時空へと駆りたてることになりました。わたしは彼が「理想型」を「ウートピー Utopie」とよんだことに関心を持ち、トマス・モア (1478-1535) のユートピア (Utopia) (1516) とイギリス国民の知的歴史の背景を研究することとになって、トレバー・ローパー (Trevor-Roper) やクリストファー・ヒルの諸著に出会うことができたのであります。わたしはトレバー・ローパーの「ヒトラー最後の日々」の第三ドイツ帝国への深い洞察に学び、そして西方近代化の1500-1650-1800-の150年ごとの三つの気候 (Climates) の命題は、私にコンドラチェフのビジネス・サイクルの長い波よりも、さらに長い社会文化の波を開示してくれました。わたしたちの世代の日本人は、大日本

帝国の統治下で、日本、東洋 (Eastern-Oriental) 西洋 (Western) の三つに区別された歴史を本で教えられてきましたので、多くの年配の世代は「日本無比」について教えこまれた考えから解放されることがまだできていません。とくに、パワー・エリートたち、かれらのある人々は、日米安保体制に迎合しながら、日本憲法は外部権力から与えられたものであるから、修正されなければならないと主張していますが、大日本帝国憲法はドイツ帝国を模範とした絶対帝国を確立しようとしたものであったことを認めたがりません。当時、世界最強と当時の為政者たちが考えたドイツ帝国は、没落した古代ローマ帝国のような父長制的軍事官僚制国家となり、ウェバーがビスマルク (1815-98) の遺産として批判したように、どんな政治教育もない民衆 (Volk) を支配し、海図のない帝国主義的拡張の怒涛の海洋をただよいつづけることとなったのですが、大日本帝国は皮肉にもドイツにおけるビスマルク失脚の年に発足し、藩閥官僚から軍閥官僚へと転化してドイツ帝国の末路をなぞることとなったのです。第二ドイツ帝国 (1871-1918) は日本における明治維新 (王政復古) 後三年廃藩置県の年に確立されました。徳川幕府の封建的幕藩体制を解体することに成功した天皇政府の新官僚たちは、ドイツ帝国の躍進する姿を見て、大英帝国 (Great-Britain) から新たに生まれたドイツ帝国へと模範国の基軸を転換したのです。崩壊した江戸幕府 (Edo Shogunate) は封建的幕藩体制をボナパルティズム (Bonapartism) によって国の統一を計るために、フランスのナポレオン帝国 (1852-71) から援助を得ようとつとめました。失敗して「大政奉還」に活路をもとめました。天皇 (天の皇帝・Heaven Emperor) の絶対的権力に依拠するために、薩長藩閥政府は「大政一新。よりも「王政復古」を協調し、太陽女神からの天皇の単線の連続性の神話を権威づけて、民衆の自由民権運動を弾圧して、軍隊と警察とによる治安の確立をめざし、イギリスとフランスの政治思想を廃除して、ドイツ帝国の權威主義を模範とする大日本帝国の確立をめざすこととなりました。明治6年 (1873) ・明治14年 (1881) の二つの政変は「維新。当時の薩摩と長州

との権力の比重を逆転して、長州閥が陸軍の組織を利用して、1922年2月1日の山県有朋（1838-1922）元老の死に至るまで権力を握りつづけ、その後の軍閥官僚の抬頭への道を開くことになったのです。わたしはマックス・ウェーバーのドイツ帝国への批判から学んで、第二次世界大戦後の数年に大日本帝国の実態が「ビヒモス」であったことを知り、このISSEIのルーヴェン会議に参加してから、大日本帝国における「東洋のカイザリズム（Oriental Kaiserism）」を根絶する努力をつづけてきているのではありませんが、なかなか効果をえられません<sup>63</sup>。

### 3. 大日本帝国憲法と「シガー・ビスマルク」

また他の面からすれば、わたしは母方の祖父、三宅雪嶺（1860-1945）から幾分の精神的遺産をうけついでいます。かれは社会思想家（Social Thinker）であり、半月刊誌「日本人」（1888-1907）の創刊者の一人でしたが、「同時代史1860-1945」6巻（1954）を敗戦後11月26日急死する直前にとにかく完結してしまいました。かれは日本の発展の始まりが、かれの誕生の年にあると考えていましたが、日本が国民国群の世界に入るのに、1853年のアメリカ合衆国のペリー提督の艦隊の到来が大きな役割を果たしたという通説をとっていました。しかし、150年をすぎた今、わたしたちは政治的事件の流れの奥底に、人間経験の深淵を探らなければなりません。そうすれば、わたしたちは近代の諸革命の波のなかの文化的風土の海変を観ることができます。わたしは東と西とを融合しようと努力した雪嶺に多くを学びましたが、かれの年令に近づくと、かれの単線的地平をこえて、人間社会の四次元構造と諸革命の四つの文化的波の社会学的視野によって、勝海舟への高い評価へと移行することになりました。海舟は19世紀後半における新しい国際関係のなかで、「裏切られた日本革命」の推進者として行動としたのですが、二組の全集が発行されているのに、今日に至るまでかれを正しく理解する人は少ないのです。

私が考えるのに、“ユートピア的市民統治”についてのかれの思想は、坂本龍馬など少数を除いては、同時代の政治屋たちには理解されなかったばかりか、福沢諭吉（1834-1901）によって鼓吹された勝海舟の矮小化された人物像は威臨丸の艦長として船酔いする無能な艦長と、將軍家への忠誠を欠いた保身の巧みな家臣という不当なもので、それが現在も信じられているのであります。福沢は慶応義塾大学の創立者であり、その一万円札に印刷された彼の肖像は日本の経済力の象徴として流通しているのですが。この倒錯した二人の人物のイメージは、大日本帝国の明治時代（1868-1912）における栄光の発展についての幻想を反映しており、物故したハーバート・ノーマンなどの日本研究を誤まらせてきました。しかし、わたしたちの国民史の良い遺産を作りだすことができなかった日本人の失敗は、過去と現在における、われわれの政治的に無智な行動の暗部を明らかにしようとしなかった私たちの無責任にもとづくものであります。しかも、われわれの権力エリートたちは、その受けた教育と経歴のために、真の国民史について、かれらの先人たちの遺産のなかで、自国民と同じように、無智なのであります。

もし勝や福沢のような1820、30年代生れの世代が明治政権（Meiji Regime）のもとでの第一世代であるとすれば、私の祖父は第二世代に属し、英語、フランス語、およびドイツ語で本を読むことができたばかりでなく、日本と中国の古典を読む力を東京帝大時代に身につけていました。かれは、真・善・美において愛智者（Philosopher）となることをもとめ、カーライル（Carlyle）（1795-1881）、ラスキン（Ruskin）（1819-1900）、スペンサー（Spencer）（1820-1903）のようになることを考えながら、ユーゴー（Hugo）のレ・ミゼラブル（Les Miserable）の一部を訳し、ヘーゲル（Hegel）（1770-1830）、とともにショーペンハウアー（Schopenhauer）（1788-1860）そしてランケ（Ranke）（1795-1886）を読んだのであります。しかし明治政権の藩閥成上がり（Cliques Parvenue）たちは、1881年以来、民衆の自由民権運動を弾圧し、まさしくロシア皇帝アレクサンダー二世（1855-81）のニヒリストに

よる暗殺の後に、1890年施行の大日本帝国憲法への道を補装したのであります。そして、宮廷と陸軍の中の成上がりたちは、『天皇の名によって』ドイツやロシアの帝国主義（Imperialism）への道を選び、中江兆民（1847－1901）を編集長とする東洋自由新聞（1881年3月18日創刊・4月30日廃刊）を弾圧しました。かれはフランス政治哲学を修め、『東洋のルソー』と仇名された評論家であります。十年後の1890年第1回帝国議会の開会以後、明治政権の為政者たちは、野党を説得することができないで、官憲の力にたより、あらゆる選挙で選挙民を買収し、反対政党の力を削ぐことに懸命となりました。政権の為政者たちは、大韓帝国をめぐる覇権を大清帝国から奪い、台湾とアジア大陸の一部を植民地化して1894年に国民の支持を得るために日清戦争を強行しました。この時、勝はこの名分のない戦争が、豊臣秀吉の朝鮮出兵（1592－98）と同じように、世界政策における悪い一步となることを予見することができました。雪嶺は明治政権のトップ・リーダーである伊藤博文（1841－1909）を批判してシガー・ビスマルクの言葉を使いましたが、初代の内閣総理大臣となった伊藤が、ドイツの鉄血宰相ビスマルクを気取りながら、葉巻の吸い方のほか、『可能性の芸術』とビスマルクが呼んだ政治を動かすステーツマンシップをまったく欠いているとみなしていたのです。伊藤は大日本帝国憲法制定の責任を担いましたが、彼の下積みとなった井上毅（1843－95）の才覚を利用しつくしたもので、大日本帝国憲法は初代の神話的天皇神武の即位の日とされた1889年2月11日に公布され、その運営は井上の意志をこえた不幸な運命をたどることとなるのであり、井上は伊藤のために一生を誤まれたと悟って死んでいったのです。発布の年がフランス革命100年記念の年にあったことも皮肉なことですが、この日、文部大臣森有礼（1847－89）が憲法発布式前に官邸において西野文太郎に刺殺されましたが、西野は森が伊勢神宮参拝の際に不敬があったと信じて、この挙に出たということです。日本における秀れた教育学者林竹二（1906－84）は日本の教育体制は、森の死後、民衆の服従を強制する調教（Disciplination）の体制に墮し、森の

内心深く、かれがイギリスおよびアメリカ合衆国でキリスト教を学び、宗教的回心を経験し、その信仰がかれの行動を支えていたものとしております<sup>7)</sup>。

さて今、わたしたちは1881（明治14年）年以來の日本の体制づくりの過程を想いださねばなりません。明治政權は1881年から84年まで、民衆の中の自由民主運動を弾圧し、82年から83年にかけて、オーストリーとドイツ兩帝國に模範をもとめ、伊藤は帰国後、1884年（明治17年）には西洋の貴族身分制を施行して、日本の古代王朝の公家位階制と中世武家支配の領主位階制にひそむ父長制的官僚制の古い酒を新しい革袋の中に移しかえました。制度取調べの責任者伊藤博文は、明治政權の実力者岩倉具視の死後にめぐまれて、みずからを伯爵の地位に高め、さらに翌年、古代王朝の太政官制に代る皇室内閣制を施行し、苦心して競争者をしのいで初代の内閣総理大臣となり、大日本帝國におけるビスマルクの權勢を握ることをめざしました。この形式的近代化をめざす位階制と官僚制との導入の裏面では、朝鮮における甲申事變の失敗を取りもどすために、清國の軍隊に対し優位に立つために、日本陸軍は軍政の近代化をめざし、ドイツの陸軍士官メッケル（Meckel）を招き、大清帝國とロシア帝國との来るべき將來にそなえて、海軍とともに軍備の充実をめざしました。父長的官僚制のピラミッドのような位階制を利用し、長州軍閥は郷土出身の退役大將たちを植民地支配の総督に任じ、その経歴を背景として総理大臣に任ずることによって、「大御所」と仇名された山縣の死後も1929年の世界不況の年に至るまで、国制を掌中に握る体制を造りあげて行きました。そして陸軍における他の好戰的な派閥が、最後の「長閥の寵兒」田中義一の死後も、1931年に滿州を植民地化し、さらに中國大陸をも征服することをめざし、ナチス・ドイツのヨーロッパ支配に劣らぬ世界支配の野望に駆られて、太平洋戦争へと盲進したのです。1860年から1945年に至る私の祖父の時代には、長閥の成上がりたちの封建的軍事的帝國主義は、大日本帝國の上昇と没落の道を、リバイアサンまたは恐龍のように闊歩したのです<sup>8)</sup>。



#### 4. 富国強兵から「損国暴兵」へ

1860年に威臨丸がアメリカ合衆国への太平洋横断航海からかえってから、開明的な日本の改革者たちに、「富国強兵」と「文明開化」の二つの標語が流行しました。前者は西の発展した国形成によって、イギリス、フランス、およびアメリカなどに追いつき、インドや清国のような植民地化と戦うことをめざし、後者は工業革命後の西世界における学問と工学 (Science and Tecnology) の文化的智識 (Cultural Wisdoms) を獲得し、綿織工業、交通、通信、教育の近代化をめざすものでした。しかし、明治維新後、政権の為政者たちは、かれらの帝国を確立するために、神政的天皇カリスマをみずからの権勢に利用しつくし、人民の民主的意志を抑圧し、イギリスが名誉革命 (Glorious Revolution) の後に、貴族制と君主制とを民主制と調和していったのとはちがい、ドイツ帝国が皇帝に至上命令権を与え、帝国議会において臣民 (Subject) の政治的権力を奪ったように、「国民国の時代」に身分国 (Standesstaat) にとどまりつづけたのです。人類の政治史に学ばず、その時代においてもっとも強いとみえた強国 (Power) の法制的道具を借用し、紀元前660年に創設された千年王国 (Millenium) の神話からフランケンシュタインを再生させたことは日本国民の悲劇でした。

貴族制度と官僚制度の「父長制的位階制 (Patriarchal Hierachy)」を導入してから、見せかけの憲法を持った大日本帝国議会の衆議院において1890年に第一回の選挙を施行し、形式的には、1894年以後、中国、ロシアおよびドイツの三帝国と10年ごとに戦い、植民地を持つ現実の帝国として「成長」して行ったかのようでした。しかし、各戦争の勝利は、天皇の神祕カリスマを高揚するために、誇張されましたが、国民の悲惨と指揮の失敗は庶民の眼からはほとんどかくされていました。教育の体制は天皇の教育勅語のもとで陸軍の最高指揮権のもとに従属され、服従の体制に利用されつくしました。いま問題の学校におけるイジメは、戦前の陸海軍における「私的制裁」と共通の根を持っているようであります。大日本帝国の政権のもとで「文明開花」は民

衆の心に道徳的秩序 (Moral Order) を育てることなく枯れはてて行き、<sup>5</sup>「富国強兵」は帝国経済の必要のために技術的秩序 (Technical Order) を<sup>6</sup>「練成 (disciplin)」しました。帝国以前の日本 (1860-1889) は工業経済の第一段階へと離陸するために、茶と絹を輸出しなければならませんでした。日清戦争後、大日本帝国は重工業のための鉄鋼を生産する工業経済の第二段階へと離陸するために、清国から戦争賠償金を奪いとり、後進帝国主義の道を進みました。清国から台湾とともに遼東半島を割譲させて、朝鮮半島の支配権を獲得しようとする野望は、ロシア、ドイツ、フランス三国の圧力によって阻止されましたが、中国分割の帝国主義勢力の仲間に入ることによって、<sup>7</sup>「脱亜入欧」への道をロシア帝国と戦うことによって更に進めることになりました。朝鮮における三浦梧楼公使の指揮による<sup>8</sup>「閔妃暗殺」(1895年10月8日)は、三国干渉によって低下した国際的威信を、クーデタによって王権を握り、親日政權の樹立をめざしたもので、甲申事変 (1884年12月4日-8日) において金玉均が失敗した政治行動をもっと拙劣な形で繰り返しかえたもので、後に満州において行った張作霖爆殺事件 (1928年6月4日) と同様の逆効果を招くものでした。そして、満州の利権分割をめぐる開始された日露戦争後、大日本帝国は、イギリスが南アジアにおいて東インド会社を設立 (1600) したように、東アジアにおいて帝国権力を拡大するために南満州鉄道株式会社を創設 (1905年11月26日) し、児玉源太郎 (1852-1906) 総督のもとで台湾統治に実績をあげた後藤新平 (1857-1929) を総裁に任じました。しかし、大日本帝国は、日露戦争では、日清戦争のように、戦後の経済発展に必要な戦争賠償金を取ることができず、南サハリンを獲得することができただけで、その開発にさらに投資が必要となりました。そこで、大日本帝国は大陸に前進するための橋として、韓 (朝鮮) 半島を植民地化する道を選び、<sup>9</sup>「日韓併合」の名のもとに朝鮮半島領有をめざすことになったのです。最高指導者伊藤は1909年10月26日、ロシアの財政大臣と協議する前に、韓国の愛国者安重根に射殺されました。安は殺人犯として翌年3月に旅順刑務所で処刑されま

した。大日本帝国の官憲は同年6月1日に「大逆罪」の名によって社会主義運動を弾圧し、そして8月21日に韓国併合を断行しました。社会主義思想は「国体」に反するものとして絶对的に弾圧されたので、どんな社会科学も官立・私立大学で公に教育されることができず、時はすぎて、35年後に破局を迎えることになったのです<sup>9</sup>。

GHQ（進駐軍総指令部）は日本の教育の中で社会主義思想を研究するためのドアを開けましたが、帝国官僚の父長的位階制の伝統は、1968年の全世界に拡がる「五月革命」における学生たちの反乱にもかかわらず、人々と諸制度のなかに根強く残りつづけてきました。その年は日本では「明治百年」に皮肉にもあたっていたのです。「国立」、以前は「帝国」大学法学部の卒業生は学歴官僚制のなかで、戦前の陸軍なしで、甘やかされつづけています。1950年代と60年代を通じて、冷戦のなかの韓国・朝鮮および南北ヴェトナムにおける熱戦の中で、日本の工学および高工学工業経済における強力な発展にもかかわらず、いや、むしろそのために、諸学問と諸工学との間の相違は官僚たちの文法の中では錯乱され、「科学技術」として統合された言葉が使われています。かれらは法体制のピラミッドの頂点から、自然における学問と工学、人間の諸文化、およびさまざまな社会、マクロ・コスモ的宇宙（Universe）を見下しています。これは、近代官僚制のなかに士・農・工・商の封建的身分差別意識のヘドロがへばりついているのかもしれない。大日本帝国の遺産は日本国民を「タコ壺文化（Octopus trap pot culture）」の中に学際的展望なしに閉じこめつづけようとしています。かつて第二次世界大戦の直後、50年前には帝國的調教の所産を批判するために、この言葉が使われたこともあったのですが。大日本帝国は、兵法的盲目（Strategical blindness）、中国における小農（Peasants）の抵抗、およびアメリカ合衆国の陸海空軍に対する工学的格差によって、太平洋戦争の中で沈没しました。私たち日本人はヨーロッパとアジアの普遍史と愛智学（philosophy）とを融合して、諸学問と諸工業の消化されない混沌から自己の本然（Identity）を取りもどさなけ

ればなりません。キリスト紀元から二つの千年 (Millenium) をこえて、つぎの千年の第一歩となる21世紀を生きぬくには、真の学智〔Wisenschaft (学と智Science and Wisdom)〕によって第二の火・化石燃料によって栄えた工業文明を超えて行かなければなりません。もし私たちが1890年から1950年に至る工業革命の第三段階において大日本帝国のバベルの塔の崩壊から、きびしい教訓を学ぶことができれば、ハイ・テク経済のバブル (Bubbles) (あぶく) の一吹きに奢ることなく、自覚をもち、18世紀以来の工業文明における科学革命の深層の構造変化を洞察し、ニュートン〔Newton (1642-1727)〕の力学(Mechanics) から今世紀における量子力学 (Quantum Mechanics) への移行を直視して、<sup>3</sup>「歴史の終わり」<sup>4</sup>とか<sup>5</sup>「イデオロギーの終焉」<sup>6</sup>とか、<sup>7</sup>「脱近代化」<sup>8</sup>、<sup>9</sup>「脱産業」<sup>10</sup>とかいう流行の言葉にまどわせられずに、アジアとヨーロッパとを融合させて行く掛け橋となることができるでありましょう<sup>10</sup>。

## 注

- 1 ISSEI (ヨーロッパ思想研究国際学会) 第四回国際会議は The European Legacy toward New Paradigms を主題として、オーストリー・グラーツ (Grag) 大学で1994年 8月21日-27日に開かれた。私はこの報告を 8月24日午後、都築忠七国際大学教授をチェアとする「ヨーロッパと日本」部会で報告した。時間の制限で圧縮された英語の内容を日本語で表現するために、原文の翻訳の内容にかなり思い切って加筆している。
- 2 ISSEI 第三回国際会議は「ヨーロッパの融合とヨーロッパの心：文化的覇権か、文化的対話か」European Integration and European Mind: Cultural Hegemony or Dialogue of Cultures を主題としてデンマークのアールボルク (Aalborg) 大学で1992年 8月24日-29日に開催、私は「文化の対話とメディア」(Dialogue of Cultures and the Media) のワークショップのチェアを担当し、また「日本近代化におけるアジアとヨーロッパ」(Asia and Europe in Modernising Japan) と題する報告を行った。同報告はISSEI 発行のHistory

of European Ideas Vol 20 No 4-6 1995年2月号883-889pp, 和文はアジア大学アジア研究所研究プロジェクトNo1『国家と民俗の諸問題に関する学際的研究』1991所収35-47頁

- 3 ウェーバーとエジプトについての私の理解に関しては、『アジア学事始』1991「社会の四次元構造」213-217頁
- 4 ISSEI 第二回国際会議はベルギーのルーヴェン (Leuven) 大学で「1992年をめざすヨーロッパ・ナショナリズム」(European Nationalism toward 1992) を主題として1990年9月3日-8日に開催され、私は「人間社会の四次元構造から観るナショナリズムと四つの波」(Nationalism and 4 Waves of Modernization) と題する報告を行った。いずれのワークショップでもナショナリズムを国家主義と民族主義の両義性をもつものとする日本での通用とはまったく異なった次元であり、私の理解が通用することに驚かされた。State を国家という二字の漢字で訳して平然としているのは、明治時代の封建的儒教用語を暗黙のうちに継承していることに気づかなければならない。本論で私は国家という前近代的な「修身・齐家・治国・平天下」の概念の混入を避けるために、国を家の上におく使用を避けている。
- 5 私の勝海舟の歴史家としての洞察への評価は「歴史と時間」(『アジア事始』所載81-108頁) を執筆した1981年にさかのぼるが、彼の「七年一変の説」をコンドラティエフの「長い波」およびトレバー・ローパーの「気候の変化」と人間のライフ・サイクルに関するエリクソンの考えを結合して、政治・経済・社会・文化の四次元構造の変化が短い波とより長いさまざまな波の中で継続しつつげていることに気がついた。普遍史 (Universal History) の概念はこの着想と結びついている。
- 6 私は当時、研究室をともにした五島茂教授のすすめで入会し、社会思想史を History of Social Thoughts とする出口勇蔵教授の報告に対して、Social History of Ideas の考えを提出してみた。翌年「ユトピアの成立」についてトマス・モア生誕500年に際してのシンポジウムに参加し、報告を行った。『ア

『アジア学事始』所収。19-37頁。トマス・モア研究については「ユトピアの思想構造」『マックス・ウェーバー研究』1977。所収39-100頁

- 7 明治政治史において、福沢諭吉と勝海舟との人物評価は倒錯されており、伊藤博文が「明治の元勳」としてかれみずからの背のびがそのまま通用しているのは、まさしく歴史学者の怠慢によるものである。大日本帝国憲法の起草に生命を賭けた井上毅について、山室信一の『法制官僚の時代』1984と『近代日本の知と政治：井上毅から大衆演芸まで』1985は井上毅の眼をもってシガー・ビスマルクの化けの皮を明らかにしている。「シガール・ビスマルクについては三宅雪嶺『同時代史』1956。第二巻195-196頁
- 8 伊藤博文を東アジアの利権を分け合い日韓併合の目途をつけるためにロシアの財政大臣ココフツォフとの会談の前に、1810年10月26日午前10時にピストルで殺害した韓国人安重根は、獄中で書いた未完の「東洋平和論」のなかで、日韓併合の果ての大日本帝国の破滅を予期していた。「同種の隣邦を剝害する者は、ついに独夫の患をまねがれることはできない」という未完の論説の最後の言葉は、1918年のシベリア出兵、1928年の張作霖爆殺、1931年9月18日の満州事変、1937年7月7日の日中事変、1941年12月8日の太平洋戦争にあてはまるコトバである。拙著『安重根・日韓関係の原像』1994年増補版。220頁
- 9 1910年3月26日、伊藤博文殺害者安重根は処刑され、その殺害の目的は秘密とされ、安の生誕百年まで公刊されることはなかった。同年6月1日の幸徳秋水ら24名を大逆罪の計画によって逮捕し、12名を翌年1月に処刑し、国体論による社会主義者の弾圧は始まり、幕末期に横井小楠（1809-69）が書いた『国是三策』1861による「富国強兵」は日本における市民的革命をめざし、列強の侵略に対応するために「強兵」が必要であり、そのために富ますことを求めるものであったが、勝海舟や坂本龍馬（1835-67）はこの路線を進んだが、大日本帝国を支配した長閥政府〔伊藤・山県・桂太郎（1847-1913）は日清・日露の両戦争の勝利の栄光を鼓吹して悲慘を抑圧し、当事者

の功績のかげに国民の犠牲を強要する貧国暴兵の道を進んだ。山県に死によって長閥支配は終わったが、なお退役陸軍大将田中義一（1864-1929）は長州出身で政友会総裁となり、昭和2年4月20日から昭和4年7月2日まで総理大臣をの職にあり、当時「長閥の寵児」とよばれた。彼が張作霖爆殺事件のために内閣総辞職に追いこめられ、二年後に満州事変を軍閥が起し、満州侵略の成功から、中国分割のために日中事変を起し、とどまることを知らず、ナチス・ドイツのヨーロッパにおける勝利に魅せられて、日中戦争続行のための資源確保を求めて太平洋戦争に突入し、安重根の予言した「独夫の患」はまさに世界中を相手に戦う結果となって、悲惨な「大日本帝国」の最後を迎える。ヨーロッパの軍事学（兵法）をわきまえる名参謀石原莞爾は東条軍閥に疎外された。

- 10 私はトレバー・ローパーの1500年から1650年までと1650年から1800年までの150年の「気候之変化」の考えを、1800年から1950年、そして1950年から2100年までが「新しい波」とするように延長し、ルーヴェン国際会議以来、アールボルグおよびグラーツの会議でその観点を推進してきた。1800年から工業文明の時代が始まり、1950年の二つの世界対戦の戦後から、テクノロジーの時代からハイ・テクの時代に、そしてナショナリズムの時代からトランス・ナショナリズムの時代に移行しつつあるものと考えており、ルーヴェンの会議でデンマークの若い教授がスーパー・ナショナリズムを問題としていることに、ヨーロッパ・ナショナリズムのE・CからE・Uへの移行が北ヨーロッパの小国の立場からむずかしい問題をかかえていることを知ることができた。「超」とか「脱」という言葉が我国では平気で使われているが、明治の第一世代と第二世代が横文字の原義と漢字の使用とに慎重でありながら、当時のイデオロギーを脱却しきれない用語を今日まで通用させているのに対して、戦後世代は漢字の原義に不用意なために、奇妙なイデオロギーを増殖しつつあるようだ。ナチズム（Nazism）のNational Socialismを「国家社会主義」と訳して平然としている翻訳者が多いのは、「超国家主義」という妙な

言葉を流通させた丸山真男の責任であるかもしれない。Extreme Nationalismと Supra-Nationalism を敢えて「超国家主義」として「国家」(State)と「国民」(Nation)とを明確に区別していた陸羯南以前に退行させてしまった丸山の責任は大きい。Post-Nationalism は今なお大きな問題をかかえており、この解決には「超国家主義」に戦前の大日本帝国とファシズム Fascism および Nazism とを一括する粗雑な「論理」とともに有害である。Francis Fukuyama in *The End of History and the Last Man* 1992は不幸にも渡部昇一教授によって訳され、「特別解説」がつけられている。渡部はフクヤマが「重厚な歴史論」を展開しているというが、Nationalismを平然と「国家主義」に等置しており、訳者のいう「いささかの曖昧さ、不明な点がない」原著を理解不能にみちびいている。「歴史の終わり」は「ポスト・全体主義」であるかもしれないが、「工業文明」はオーストラリアの歴史学者ジェフリー・ブレイニー (Geoffrey Blainey) の大きなシーソー＝1750年から2000年 *The Great Seesaw* 1750-2000が取り上げた250年の歴史を持つにすぎない。500万年の人類の歴史の二万分の一にすぎない。農業革命の一万年、都市革命の五千年、そしてキリスト紀元二千年、いま新しい千年に突入しようとしている人類である。一すじの路を行く「幌馬車隊の行列」をイメージとするフクヤマの「歴史」には残念ながら時空 (Time-Space) の波動 (宇宙船時代の展望) が欠けているようである。題名が「歴史の終わりと末人」とあるのは、私が50年間つきあってきたマックス・ウェーバーとニーチェの影響を残しているようだが。